

セルフ・コントロールおよび価値割引研究の基礎と応用

Basic and Applied Studies on Self-Control and Discounting

企画 平岡恭一(弘前大学) 高橋雅治(旭川医科大学) 司会 平岡恭一(弘前大学)
 話題提供 池上将永(旭川医科大学) 空間美智子(神戸学院大学) 村井佳比子(相愛大学/
 日本大学大学院総合社会情報研究科)

指定討論 佐伯大輔(大阪市立大学)

Kyoichi Hiraokah(Hirosaki University) Masaharu Takahashi(Asahikawa Medical University)
 Masanaga Ikegami(Asahikawa Medical University) Michiko Sorama(Kobe Gakuin University)
 Keiko Murai(Soai University/Nihon University) Daisuke Saeki(Osaka City University)

Key words: Self-Control, Discounting, Neural base, Educational application, Psychotherapy

セルフ・コントロールは様々な立場から研究されてきたが、近年即時の小報酬と遅延された大報酬の間の選択行動としてとらえるアプローチが定着してきたように思われる。また価値割引の研究も進んでいる。本シンポジウムでは、比較的若手の研究者の皆さんに、それぞれの専門領域の立場から現在のセルフ・コントロール研究との関連について論じていただく。

話題提供

セルフ・コントロールと衝動性の神経基盤(池上将永)

最近の認知神経科学において、セルフ・コントロールや衝動性の神経基盤を明らかにする研究が進展してきている。その理由の一つには、物質依存や注意欠陥/多動性障害(ADHD)等のさまざまな問題に、衝動性が関連していることが挙げられる。認知神経科学における衝動性の概念には、主として、遅延される報酬の主観的価値が急激に割り引かれる傾向(時間割引における衝動性)、および習慣的・自動的な運動反応を抑制するのが困難であること、もしくは熟慮なしに反応してしまうこと(反応抑制の失敗)が含まれる。この2つの衝動性概念は互いに異なるものであるが、これらの衝動性の制御に、前頭前皮質、およびそれと連絡している皮質下の領域の活動が関わっていることが明らかとなってきた。ここではまず、衝動性とセルフ・コントロールに関わる脳内の領域について概観する。次に、衝動性の神経基盤に関する研究が生かされる臨床的な問題の例として、ADHDを取り上げる。ADHDでは、反応抑制の困難に加えて、遅延報酬による行動の統制力の弱さが指摘されている。ADHDの薬物治療が、これらの衝動性を改善するメカニズムについて、研究例を交えながら紹介したい。

子どもの価値割引研究と教育場面での応用(空間美智子)

子どもの社会化において、セルフ・コントロールの獲得は重要である。セルフ・コントロールの未獲得は、集団場面での不適応にもつながることから、教育現場における個別の介入や、心理教育等の予防的介入の必要性も高まっている。子どもの遅延割引の発達的変化の過程を明らかにし、有効な介入法を検討することが求められている。本シンポジウムでは、就学児および就学前児を対象とした価値割引研究を紹介した上で、これらの基礎研究が教育現場においてどのように応用されるのか、今後の展望について議論したい。これまでのところ、新たに開発した就学児用遅延割引質問紙を用いることで、6歳児から12歳児の遅延割引率が、年齢が上がるにつれて低

下する(セルフ・コントロールは高まる)ことが明らかになった。4歳児から6歳児における同様の変化は、実験的手法を用いることで確認されている。応用研究としては、小学校におけるセルフ・コントロールに関する心理教育授業の実践と、自閉症児を対象としたセルフ・コントロール訓練について報告する。

心理療法とセルフ・コントロール研究: 価値割引研究の衝動性制御への応用(村井佳比子)

行動分析学においてセルフ・コントロールは衝動性に相対する概念として位置付けられており、中でも価値割引研究の展開は衝動的選択がどのような条件で生じるのかについて実験による検証を可能にしてきた。一方、衝動性については脳の前頭前野、特に眼窩部周辺と関連が深いことが知られており(Damasio et al., 1994)、この部位に共通する脳機能障害の可能性のある一連の疾患群として強迫スペクトラム障害という概念が提唱されている(Hollander et al., 1997)。強迫スペクトラム障害とは、強迫性障害と連続性のある疾患群のことで、摂食障害や抜毛、病的賭博など、反復する行動の制御ができないところに共通点を持つ。これらの疾患に有効な治療法として行動分析学を背景に持つ行動療法が大きく貢献してきたが、特に最近では行動分析学から生まれたアクセプタンス&コミットメント・セラピーのように、即時報酬(回避やリスク探究)より遅延報酬(人生の価値)を選択するための心理療法の開発が進んでいる。

本シンポジウムでは遅延報酬の選択を阻害する要因と介入の方法について臨床事例をあげながら、今後の価値割引研究の可能性について示す。

指定討論(佐伯大輔)

主に以下の内容について議論を行う予定である。

- ・価値割引研究では、衝動性の程度は割引率によって表されるが、衝動性は多次元からなるという考えが一般的である。話題提供で紹介される「衝動性」は、価値割引の枠組みから、どのように把握できるのか。
- ・価値割引に関する応用研究では、異なる特徴を持つ人達(喫煙者而非喫煙者等)の間で割引測定を行い、結果を比較するという意味での応用は多くなされているが、価値割引の知見に基づいて衝動性を低める手法を開発するという意味での応用は、あまりなされていないようである。基礎研究の知見を、衝動性の低減のために利用できる可能性についてご意見をお伺いしたい。